



序

膝に兎の耳、鷹の目といふことが御座る。御覧なさい！兎は耳が長く、鷹の目が鋭い。目の鋭いのは、観察の確なの、耳の長いのは、さて何て



あらう。處で、恰今年は卯年。卯は即之兎で、耳の長いものが生れ出る時だ。さればこれを讀んで、未だ年若いなといふ人があれば、耳の長い編者

は、この陰言をも聞きつけて、十三などなんと！と睨み申すべ、あなかして、自分の頭の蠅も追へぬくせに、人の噂のどりどりに面白くて、かくいものしつ。二本の箸の上げおろしに、叱言は言れても、一

高襟珍譚目次

- △巖谷小波氏と門達の艶聞……………一
- △稻満公使と舌の敷……………三
- △川上音次郎子と夜會……………二七
- △河口戀海師と艶福……………三三
- △徳富蘇峯氏の二度愕然……………三五
- △大下藤次郎氏と日露開戦……………三八
- △大下藤治郎氏と點燈のお叱言……………三三
- △小嶋大佐と佛蘭西語……………三五

本の筆を捨ることの出来無い、飛んだ道樂ものを生んで退けたをやく  
 と何事も大目に見て讀むて、そして買ひ玉へと、追手ながらに、虫の  
 本屋の傳言まで、あらくめで度かして。

耳の長いうとしの秋

桐より一葉か先へ御免と……………編者曰

附 録

- △松本君平氏と絶交……………八〇
- △長谷川四述氏と國事探偵……………八五
- △橋本圭三郎氏と祖神論……………八八
- △池邊義象氏の画美人論……………九一
- △中村不折氏と毒……………九三
- △戸水寛人氏の日露比較説……………九八
- △井上公使の已惚鏡……………一〇〇
- △安藤謙三郎氏と敵愾心……………一〇二

- △澁澤男と手袋……………三八
- △森鷗外氏とステッキ……………四一
- △丸山晚霞氏と膀胱麻痺……………四六
- △巖谷小波氏と影武者……………五一
- △巖谷小波氏と玩具……………五二
- △巖谷小波氏と切手巧見……………五九
- △土肥春曙氏と襟飾……………六三
- △井上甚太郎氏のノウ、イエス博士……………六八
- △井上醫學博士とチストマ……………七一
- △稻田周之助氏の印度通……………七六

大 洋 行  
度 行

高 襟 珍 譚 目 次

- 第八 靴ツツ
- 第九 其他の携帶品その他のけいたいひん
- 第十 髪かみ
- 第十一 鬚髯ひげ
- 第十二 言語げんご
- 第十三 自轉車じてんしゃ
- 第十四 寫眞器と繪の具しゃしんきとゑのぐ
- 第十五 銃獵じゅうりやう

當世ハイカラ修行たうせいはいかるしゆぎやう

- 緒論ちよろん
- 第一 衣食住いしょくじゆ
- 第二 態度たいど
- 第三 嗜好しやうご
- 第四 帽子ぼうし
- 第五 杖節そうせう
- 第六 眼鏡めがね
- 第七 時計とけい

大 洋 行 高 珍

襟

参

譚

△ 巖谷小波氏と門達の艶聞

大和灰殻 編

あなかしこ、本書の讀者は必らずこの話柄を餘所にし玉ふな！と力み返るでも無いが、氏が伯林滞在中の珍譚として、是非これを紹介せねばならぬ。

氏は先刻御承知の通、伯林でも流行見で、随つて毎晩のやうに夜會へ招待されて居た。

すると或る晩のこと、氏は例の如く燕尾服を着け、さる處の夜會へ往

思ふ事いほは、腹ふくる、わななりとや。されば我

居ながらにして名所を知る歌人を學び、愛に居ながらにし

て、海外の事を語り、又は○○○○の五文字を頭に置きて

はな眼鏡する遊飾やすすめちく

らさ無き事にあたら氣なもみ

つて、いつもの通りビーヤの一杯機嫌で、腰掛に倚れながら、ワットの履きを餘所に聞きながし、獨りニコニコして居ると、其處へ這入つて来たものがある。

「オヤ、貴所へに居らつしやいましたの、先程から何様なよお尋ね致しましたか知れませんか。」

言ひつゝ、側近くやつて来たので、その人を見ると、貌は見覚え無いが兎に角一個嬋妍たる妙齡の處女だ。

其所で氏は起ち上つて席を譲り、先づはそこへ腰を掛けさせたが、處女の方では既し氏を知り抜いて居るやう、餘り馴々しくするので、氏は人間違ひでは無からうかと、内々ビクビクもので居た。

と、機敏な處女は、早くもそれを見てとり、すかさず切り込むで、

「貴所は定めし、紹介もなしに妾が恚うやつてお側へ参りましたのを、

變な奴だと思召しますでせうね。い、い、實際無紹介で恚うしてお話し致しますのは、まことに失禮な次第で御坐いますが、妾は貴所が巖谷さんと仰有つて、東洋語學校の先生をなすつて居らつしやることまで、よく存じて居りますので、實は誰かお紹介して頂いてと存じましたの

ですが、それでは少し都合の悪いことが御座りますもんですから貴所、假面を被つたつもりで、突然に恚うして上りましたやうな譯で………」

……」  
言ひさして、熱心な調子で、

Wald

万望悪からず……そして、これを御縁に此の後とも御恩意よ……  
……」と添えた。

で、根が交際好きの氏は、元よりこちらも望む所と、

「いや、私からこそ左様願ひ度いのです！」と、互ひに名刺の交換も済  
まし猶くさくさの物語りなぞして、其夜はそれで別れた。

處がその翌日のことである。氏は學校の教授を仕舞つて、宿に歸つて  
見ると一通の封書が何所からか届いて居つた。早速封を切つて見ると、  
女文字の走り書きで、下の如く記されてある。

一筆示し上り。昨夜は突然御休息の所を御驚ろかし申上まことに  
く、失禮致し候、就ては、ちと御目もじの上、御願ひ致し度きことも

有之、委細は其節御話し申上げ候へども、明日を待たれぬことにも御  
座候ま、是非く今夕六時よ〇〇公園のシエレー銅像の前まで御越  
し下され度く、彼所よて御待受け致し。餘はおめもじの砌に萬  
々、まづは取急ぎ右まで、あらくめで度かして。

讀み了つた氏は、少からず感つた。  
「考へて見ると餘程變だ。第一昨夜だつて突然這入つて来て、あゝいふ  
風に列懇なもの同士のやう、初めから馴々しく話かけて来るし、今日は  
今日で此の手紙だ。お願ひ致し度きこと……明日を待たれぬこと……

……何だか女郎が馴染の客に無心をいふ時のやうな手紙だが、まさか  
金子を貸せでもあるまい。何しろ陸軍中佐の妹で、家には可なりに資産



「よく来て下さいました、昨夜といひ、あのね手紙といひ、さぞ變な奴  
だと思召しで御坐いましたらう、まことにすみませんとぞ……」  
處女は今更らに羞を含め、俯目がちに先づ憊う詫ひる。  
「奈う致しまして、れ易い御用—御用といへば何ぞ私よ……」  
「は、あのツ……」  
言ひかけたが、急よ氣をかへて、  
「こゝで申しますまい。貴所カフェまでおつきあひ下さいませんか—」  
「宜しう、おつきあひしませう。」  
然る程に二人は相携へてとあるカフェへ往つた。  
「伺ひませう、幸ひ邊に誰も居りませんから、今の内に御遠慮なく……」

*Capp*

もあるのだといふから、よもや一面半面の職めるものた、うんな卑し  
無心でもあるまい。して見れば何だらう……よもや、戀……  
そんな事ぢやあるまい。併し奈うも變だ。とらつて、わらつて手紙ま  
でよこされて見れば、まさか知らぬ貌も出来無し、憊うつと……  
「いや、兎も角もいつて見やう」  
憊う決心をつけた氏は、思ひ出して懐中時計を見ると、早午後四時半  
過ぎなので、そこくに仕度をして、五時過ぎに宿を飛び出し、幸ひ來  
合はせた辻馬車を備ふて、指名の〇〇公園へと急がした。  
斯くて馬車の公園へ着くとひとしく、急ぎ足で打合せのシエレーの銅  
像の處へ往くと、彼の處女は既に其所に居て、氏を待ち設けて居る。

*Don't you know  
Knapling*

……」  
處女は數多度首肯して、

「巖谷さん、突然に異なることを伺ひますが、あの○○さんは貴所とは別戀で居らつしやるようですね？」

「は、○○君とは學生時代からの親友で、それが奈うしました？」  
氏は心のうちで、こりや變だぞと又候怪み出した。

「では貴所は彼方と今でも御交通なすつて居らつしやいますね。」  
「勿論です。それが奈うしました。」

氏は返答の終末には必らず「それが奈うしました」の一語を添えて居る。

*Handwritten signature: Kazumasa Nakamura*

「おの方はお國と奥さんが有んなさるんですつてねー」

いよく風撲様は西へ變つて來た。併し氏はわざと空嘯いて、

「奈うですか、私は未だ聞させませんでしたか？」

其實氏は○○に妻のあることをよく知つて居るのだ。

「い、貴所も隠よなつてもだめで御座いますよ。妾ちやんと存じて居りますから……か、それは奈うでもよろしう御座います。」

いひさして、一寸言葉を切つたが、

「實は前々からのことをお話しなければ、定めし變に思召ませうが、妾と彼方とは一昨年の夏から御懇意に致しますやうになりましたの。處が御承知の通り妾の兄も軍人で御座いますし、彼方も軍人で居らつしや

るものですから、兄も大層頼もしく思ひまして、今更ら取りかへしはつきませんが、彼方と夫婦の御約束を致しました。すると、段々御交際して居るうち、奥様は元より、お子様までおありの方といふことが判りましたので、考へて見ますと、薄情な方にはよくありうちのことでありますから、無論初めから妾を弄ぶ積りでなか、んなすつたらうと存じます。けれども妾今更ら何も申しません。唯だこの品を彼方にお返しなすつて下さればそれでよいのです。」

言ひつゝその左の中指に籍めて居た寶石入の指環を抜いて氏に渡す。氏は流石にお願ひの用といふのが、餘りに意外のことだつたのに驚ろした。初めの様子では奈うやら……であるやうに思はれたのに、何の

ことは無い、媒妁人が嫁さんから亭主の残想をいつて尻を持込まれた形で、内心こんなとなら、わざ／＼時間を費して来るんぢや無かつたに！「アム、ですか、なアる程……よろしい、確にね預りして彼奴に渡しますが、先方から取る物でもありませんか。」

氏は少し捨鉢の氣味で、さてこそ慙くは投げ出した。

「いゝえ、それはよろしう御坐います。妾も此國に居るのハ嫌ふなりましたから今夜これから出發まして、伊太利邊を歩いて来る積りですから………ハイ、無論一年経つて歸るか、二年経つて歸へるか、乃至このまゝ歸らぬか、その邊は別りませんのですから、折角御懇意を願ひました貴所に、こんなことを願ひばなしで參るのは何ですが、万望惡からず……」

……」

「さ、さ、さうして……」とほらふもの、斯かる階級に於ては、  
交際を求められたとすれば、「さういたしまして」處の話では無さ、  
「馬鹿々し、畜生！○○逢たらしつかりつてやらんけりやならぬ。」

如何にそれ程の……

ふみだいらにまづなりに来る……

### △ 稻満公使と舌の數

暹羅國駐劄全權公使稻垣滿次郎氏の名は、今の稻満君なる名稱を以つて、夙に世人に知悉せられて居る。

それだけにこの人は才子肌の男で、流石に外交家として永く世に出て居るだけ、人づからあひも巧みなものだ。

氏は常に暹羅人に向つて、その國産の富裕なことを賞し、わが日本國は早くから貴國と特別の交誼を結びたがつて居るやうに言ひ觸らし、又日本人に對しては、暹羅人は常に好意を以つて日本人を待ちつゝあるやうに吹聴して、兎角に彼我の親睦を温ためやうと務めて居るが、或る人

はこれに評して、

「稻垣は實に媒妁人的言語を弄する」といつた。すると傍ら聞いて居た暹羅人は不審氣に、

「それは何故ですか？」と質問したので、其人は別何の氣も無く、

「何に、彼人は兎角舌を何枚にも使ふ癖がある人でな。」と、日本流に説明した。

と、その暹羅先生驚くまいことか。目を丸くして飛んでいつたが、いきなり稻垣氏の處へ来て、慍ういつた。

「稻垣さん、失禮ですが貴所の舌の数は何枚ですか？」

事情を知らぬ氏は寝耳に水の形で、一向に何の意味かそれが判らぬ。

「何ですか、最う一度いつて下さる。」

「何その舌の数は？」

「舌の数は一枚しかありませんよ。」

「ええ、そんな筈はありません。貴所は二枚も三枚も持ちださうでは御坐いませんか。決して他言は致しませんから、漏じ下さり、万望——」

「困りますな、一枚しか無いのですから、さう申すより仕様が無いではありませんか。」

氏は實際これに弱り果たのである。

「でも〇〇さんかどう仰有りましたか。」

ちよ 〇〇さんかどう仰有りましたか

「○○が……彼奴場所を考へんで種々なことを言ふから實に困つてしまふ。よろしい、では○○をお連れなさい、私が貴所の前で、その虚言であることを申させますから。」

これで暹羅人はその○○君を連れに往く。そして其人から前に言つた言葉は日本の偶言で、一種の比喩であることを説明をし、漸くにして事は相済みとなつたが、それからは稻満氏の舌の敷とて、一場の笑話が彼處の公使館に残されたとき、めでたしく。

よしやた、一枚きりの舌なれど

切り實れとあれば何ぞいなまん

### △川上音次郎子と夜會

日本のアーヴィングを以つて自ら任じ、歐米の梨園に川上なる名を止めたる同優も、内々聞けば今日あるを得た抑々は、これも日本のエレンテリを以て自ら撰して居る、貞奴が居たからで、その證據には憊ういふ話がある。

恰も同優等が巴里へ乗込ひで、例の新舊突き交せ芝居を演つて居る時のこと、彼の貞奴の「道成寺」が非常に巴里人の意向に投じ、大好評を博した事があつた。

すると巴里人のことであるから、早速川上夫妻に招待状を發して、夜

會に出席を促した。其所で川上夫妻は内心大得意になつて、その夜會へ出かけて見る。と、何がさて世界の美を一所あつむるといふ佛京巴里の事であるから、會場の善美を盡したと、いつたら、正しく眼を眩するといつても、敢えて贅では無い。

川上夫妻の、心の中で此の大なる集會が自分等の爲めにわざ／＼開かれたのだと思へば懐る嬉しく、すまじ込むで場内へ入ると、俗人團の奏樂一入華やかになり、人々は川上夫妻の前に蟬集した。

これ迄は至極平穩無事、川上大得意の舞臺であつたが、さア其先が大變だ。

兎角して舞踏が始まる。人々はなだれを打つて其渦中に飛び込む。川

上夫妻はこの面白き光景を眺め入つて居ると、忽ち數人の者がドヤ／＼とやつて来て貞奴に舞踏をすゝめた。

「アダム、御一所踊りませう！」

貞奴は驚ろいて小さくなつて居ると、渠等はシャニムニその手を把つて右の渦の中へ連れ込む。

呆氣よとられたのは川上音次郎子で、様子が判らないから手持無沙汰に扣へて居たが、連れて行かれた貞奴が何時迄経つても歸つて來氣いので、劫を煮やして一人旅館へ歸つて仕舞ふと、夫れから二時間餘も經つて、天明方の四時頃待ち焦れた貞奴はそれでも無事歸つて來た。

それから翌朝十時頃迄は、疲れたといふので貞奴が、スリ寢込むで起

きて来なかつたが、その後とも、夜會の度に結果が憊うなので、遂には川上も堪え兼ねて夜會往きは止めにしやうと言ひ出した。

と、貞奴の却々承知しない。

「ふ、ちやありませんか、皆さんが私共をわゝして大騒ぎやつて下さればこそ、芝居も成功するといふもんでさアね。郷に入つては郷に従へといふこともありますから、まゝ此のまゝに人氣を損じ無いやうにするのが肝腎ですよ」

「ふ、それもさうだが……」とはいふものゝ、川上とても人氣大事といふ位は先刻御承知の男だから、ホテルへ歸へつてから人知れず夫婦喧嘩をしたこともあつたさうだが、それでもまづぐメタルまで貰ふ迄の成

功を見るに至つたのだと云。さもわりなん、さもさうすと然る人は語つて居た。

眼様はおまのの御下ひさしつて  
やうございっつも先きに立てらる



△河口慧海師と艶福

黄蘗山に入つて奥義を極め、印度佛典の翻譯が、西藏ものに限ること  
を覺つたので、速かに入藏行を思ひ立ち、雨雪を凌いで彼の地に入り込  
み、親しく修行の功を積むだ師も、その甲斐あつて歸朝後非常な歓迎を  
受け、商業會議所にも招かれ、同志記者俱樂部も聘せらるゝと  
いふ風で、毎日毎晩のやうな方々へ往つては、艱苦を嘗めた當時の話を  
して居るが、師が深く秘して、未だ嘗て誰にも言はぬ話柄がある。  
併し秘密程世に漏れ易いものは無く、師はすまじ切つて、お釋迦様で  
も御存じあるまいと安心して居ると、そのお釋迦様よりメツと下つた、

人間が既に御存知で、常人の耳には入るまいが、噂はそんじそろこらに  
専らで、口さが無い京童子は憊うした話をする。  
全体西藏と、いふ處は、坊さんの大層好遇る處で、大抵な坊主が情婦  
の二三人は持つて居るといふ、一風變つた國だが、師はこゝへ來てから  
目のあたり其態を見て、流石に初めは驚ろいて居た。  
すると、間も無く、今迄は人の上であつたのが、今度は自分が矢張そ  
れになら無ければならなくなつて居たのだ。  
何しろ、日本へ歸つて來ても彼の位の人気取りであるのだから、彼國  
でも中々の花形で、年は若し、器量のあるといふので、随分ヤイノを極  
めるものがあつた。

が、何といつても日本の僧侶は、女人戒を守らなければ無らいことになつて居るので、師は強て木石を學びて居る。けれども對手の張り方は却々手酷しく、邪が非でもその一念を通らうとするので、如何に僧侶とて有情の人間ではあり、殊には血氣に満ちた年頃の師とて、果てはその申込みを斷り切れず、遂に張り落されて、その意に従つて居たとやら。思ふに、師にとつて此の方が寧ろ入藏中の苦心として、人に語る値があるかも知れない、それにしても知り度きは、其情人の名、年、容貌である。まさか腰の曲つた老婆さんでもあるまい。

〇〇〇〇〇〇〇〇  
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇  
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

トロは之聞けば固く逃げて居る

### △徳富蘇峰氏の二度愕然

國民新聞主筆、蘇峰徳富緒一郎氏、世界漫遊の折柄、露國を過ぎて、トルストイ伯を訪はんの念急に、すべての用事を打ちやつて伯の閑居なるヤスナボリナの村へと志した。

當時氏が第一に驚いたのは、氏が停車場に下車すると共に、驛長を始め其邊のものが、氏を見て直ちトルストイ伯を訪ねに来たのだと知つたことで、無論辻馬車もその家を知つて居れば、草も木も伯の訓陶に浴

して居るさまが見える。

ろこで、氏は伯の平生を思ひ見、その人なりを想像しつつ、聽てその家へ着くと、折よく玄關の處へ一人の老人が居た。で、刺を通じて而會を求めると、その爺さんは主人に取次もせず、獨りで承知して、どある應接室へと通す。

氏はまたその餘りに個人主義なのに驚いて、猶今から會ふべき伯は奈んな人であらうかと、頻りにそれを考へて居た。

するとや、しばらくして戸が開き、

「や、よくおいで。唯今は失禮！」と這入つて來た人を見ると、意外も意外、先刻の爺さんであらうとは、誰にしても驚ろかざるを得ない話で

あらう。

伯は其様をことよは一向に頓着無く、例のニコくしなから、

「恰も出かけて居たものですから、直ぐにお會ひ申すことが出来ませんで……」と以前のまゝの服で、無様な木製の椅子に腰を下ろす。

氏は今更らに極悪く、

「奈うも先程は誠に失禮を……」とまではいつたものゝ、先生とい存じませんでとも言ひ難く、實際は想像して居た伯を、もつと派立な、風采堂々なる者と思つて居るのだが、うやむやの中に、漸く挨拶は濟まし、兎も角も無事に伯と會見の望を遂げたが、彼の時位、愕然したことは無かつたど、今以つて話の追手にはよくさう言つて居る。

姉ならいざしらぬになる年を

〇〇〇〇〇〇見て二度の愕然

### △大下藤治郎氏と日露開戦

太平洋畫會の所領株で、水彩畫の大家で、才子で、勤勉家で、旅行好きで……と紹介する迄もなく、大下藤治郎氏といへば先頃歐米を漫遊して、新しく歸朝した人の一人であるが、氏が薩岐丸に便乗して、歸朝の途次であつた。

恰度その頃は、今日よりも東亞の問題なる滿州の徴兵に關する外交問

題が盛な折柄で、船中でも奇ると觸ると之沙汰であつた。すると或る日の事、船のスエズへ差しかゝらうとする時、突然船中が騒ぎ出して、乗船の外國人等は、いづれもステッキ、蝙蝠傘の類を手にして、練兵の眞似を始める。

聞けば、東洋の平和が遂に破れて、日露開戦の報があつたとやらで、例の揚示場にはその報告が掲げられてあつた。

客の一人は物知り顔に恁ういふ。

「貴所は日本のれ方ぢやありませんか、よくそんな平氣で居られますね。大變ですよ、日本と露西亞は到頭戦争を始めたさうで、この運河を通り越すと、それから先は大層危険ださうですから、現に軍艦が一艦保

護の爲め来て居るとの事です、貴所大變ぢやありませんか！」

そこで大下氏等は一層の驚きをなして、早速船長の處へ駆けつけた。そして事の始末を聞くと、船長は怪訝な顔つゝとして、

「さうな、そんな筈はありませんがな。」

「でも揭示場に貴所の報告が出てあるぢやありませんか。」

「どうしまして、私はそんなものを書いた覚えはありません。それは何かの間違でせう。」

外國人の言ふのと、船長の語るのとは、全然うらはらなので、それではとて、人々は揭示のある所へ赴いた。

見ると成る程揭示はあるが、それは或る外國人が、航海中の徒然に、

一人の憶病な外國人を欺さう爲めにした、狂言で、其證據には右の揭示  
船長の印が捺して無い。……と、見れば他の外國人が大騒ぎして、練  
兵の眞似な姿して居る甲板の隅に、小さくなつて眞青で慄えて居る一人  
の外國人があつた。これでこの話の真相が判り、後は大笑になつて仕舞  
つたが、大下氏等は、一外國人の憶病の爲めに、飛んだ心配をして、然  
かも、歸朝の船の中で、既にまた味噌を附ける處であつたので、口で  
は唯だ、

「何だ、一抔喰はされたのか」とのみであつたが、内心甚だ心外千萬であつたとやら。

臆病さう人があつても乗り合ひて

のせられ損なせよぬき丸

△大下藤次郎氏と點燈のお叱言

是も同じく氏が歐米漫遊中の珍談であるが、恰度氏が北米の各地を巡つて、英京倫敦に入つた時のことである。

氏は北米の各旅亭で、その設備の完備なもの驚いて、流石に文明國は違つたものだ感心して居た矢さき、倫敦へ入つたのであるから、一層その醜いのと、凡べてが舊式で、不自由なのに又た臆をつぶして居たが、

何しろ着いたばかりで勝手も判らず、汚苦しい部屋に通されて、衣服なを改めて居ると、晩食の報知があつたので、兎も角食堂へ出て見ると、此所も米國とはな月様と提燈程の遠で、何を食つても彼程に甘く無い。そこで止を得ず、よく食事を作舞つて、部屋へ歸つて見ると、卓子の上手紙様のものが載つて居るに取上げて見ると、これは勘定書で無く、實に左の如き一通であつたのだ。

「貴殿は食堂へいらいで節、部風の燈光を御消しなされず、誠に困入り候、爾來よく御氣を付け下され度、不規則は白色人種の最とも好まざる所、御坐候。」

これを見了つた大下氏は、口の内、獨舌打ちして、

「エ、點燈のお叱言か、各臭い！矢張こゝは島國根性が穢けぬと見え  
るわさ。」

〇〇〇  
てんはあきまへんこホテルの亭主

愚痴を云

### △小島大佐と佛蘭西語

陸軍工兵大佐小嶋好問氏が往年英吉利へ派遣された時の事である。氏は元來佛蘭西語の達者で、巴里の事には可なり精通して居る方であつたが、英吉利の事は五里霧中で、現に倫敦へ出張したのも初めてであつた。

夫故勿論、英語にも精しからず、言はゞ啞も同然であつた。處で、倫敦へ着いてから、とある旅館へ行李を止めたが、巴里とは違つて、随分汚い英國のことであるから、大佐はその旅館を格式よりすと下のものに見て仕舞ひ、到底も恚んな旅館では、佛蘭西語などの使へ

番頭は居る氣づかひ無いと、獨り合點に相場を定め、片言交りの英語と手真似で、不自由に日々を過ぐして居た。

すると或る日のことであつた。番頭先生何か用事があつて大佐の部屋へ遣つて來、初めは例の手真似で互ひに用事を辨じて居たが、フト番頭先生佛蘭西語を口すべらした。と、大佐は之れを聞きつけて、

「お前は佛蘭西が出来るのか？」と、今迄の手真似とは違ひ、至極明快な佛蘭西語で尋ねると、番頭先生も首肯して。

「貴方も佛蘭西をなさいますか」と、これも明快な佛蘭西語で問ひかへす。

「いや、ろんなら憚んな窮屈な思ひして、片言交りの英語なんぞ使ふん

ぢや無かつたに！」と後は双方大笑ひになつて、それからといふもの、旅館の亭主を始め、家族の者等にもそれを使つて見ると、どうして却々、大佐よりも餘程上手だ。

其後大佐はこの話柄を人々に語つて、

「流石に汚くても英京倫敦の宿屋です。何に、英語が出来ぬからとて、彼處へ往けぬといふ氣遣はありません」と。宜しこそ、大佐の今回の出張にも、彼の旅館へ行李を止めらるゝ筈とやら。

〇〇〇〇〇  
ふらんすな獨合點の通より。

通じぬ英語などは眞平



△ 澁澤男と手袋

コックの服を着込むで、天晴流行の粹を極めたものと獨り合點し、飛んだ滑稽を演じた澁澤榮一氏も、今日では日本の華族様と迄なりすまし、歐米の實業視察を思ひ立つて、再度の洋行をしたが、流石に以前の様なしくじりの無く、常人自らも内心で「一かどのハイカラー」になりすました氣で居たが、それかあらぬか今回の洋行に、佛蘭西の巴里で日本から持つて來た手袋が破れたからとて、新調をしやう爲め、伴の者を連れてブラリ町へとそれを求めに往つた。

處が御存知の通り巴里といふ處は生馬の目を抜くといふ大した都會で

手袋店には例の美形が好い鳥もか、れかごと待ち構へて居る。

男爵はそのとある店へ這入つて、例の調子で、

「手袋を下さし！」と恠しげな佛蘭西を操ると、

「さつしやいまし、あの奈んなのを差上げませう？」と、ぬからず愛嬌たつぷりの笑貌を見せられた。

併し男爵は此處ぞと澁面作つて、あれかこれかと思せられたをよい加減にめしらひ、

「ぢやこれを………畏まりました。こちらへお掛け下さりませ。あの箱めて差上げませう！」といふを耳にもかけず、手袋だけの價を拂つて、スタコラ旅館へ歸つて來た。

其所で伴の者が何故あの美人に籍めて貰ひになりませんでした。飛んだ景物を御損なさいましたものですね！」といふと、男爵は首を振つて、

「否、さうで無い。あれを景物だと思つて籍めて貰うて見い、それこそ飛んだ纏頭を興らねばならぬ、すれば此の手袋も大變な高いものになつて仕舞ふちや無いか。な、巴里へ来たなら誰でも巴のやうよして居れば、目の球の飛出るやうな金子を滅られることも無うて済むのだ。」

併し手袋屋の美人は呷やいて言ふ。

「客な外國人だね、巴里へ来てあれぢや困つたもんだわ！」

ほんきに遊い男ださ美形いひ

△森歐外氏とステッキ

陸軍の軍醫監で、醫學博士で、そしてたまげに大文學者である歐外漁史、史森林太郎氏は、随分眞面目な人で、餘り滑稽な失敗も無い方であるが、氏が獨逸へ洋行中の奇談に左の如き愛嬌話がある。

それは恰ど、氏が獨逸へ留學を命せられた時、その饑別にとて京都の某彫刻家から贈つて来た象牙の調羹があつた。

一体石の彫刻家は、この調羹を彫る事に妙を得た人で、その刀よ上つ

た彫刻は、真物の調像と寸分相違無いので、非常な有名のものである。其所で氏はこの贈物を得て、夫をステッキの首につけ、さて出發して獨逸へと越した。

すると伯林に滞在して居る内、某といふ生理學の大家と懇意になり、始終往來をして居たが、其内右の博士が彼のステッキの首飾を見つけてこの調像は何處で發見したのかと驚いて尋ねる。

歐外氏は元々作物であるから、其よしを話すと、博士なかく承知なす。

「そんなわけがあるものか、これは確か真物の調像だ、それに相違あるやう。」

「いや、實際象牙彫つたもので、作物だ、私は虚言は言は無い。」

「いや、そんなわけは無い。」

「わけが無かつたつて作物は作物だ。」と容易に議論は止まない。が、よく考へて見れば生理學上恠んな人頭骨があらう筈が無いのであるから、博士も後には我を折つて、

「左様なア……併し作り物としては天下の絶品ぢや。それでは私に預けて貰ひ度いものだ、値は何程でも拂ふから。」と、今度は所望と出掛ける。

是は歐外氏もした、か弱つて、實はこれくでわざく贈つて呉れたものだから此品ばかりはと斷はると、少時考へて居たが、博士急に何

か思ひ出したといふ風で、そこへ歸つて仕舞つた。

斯くて一二時間を経た後、氏はボアーの大公園へ散歩へ往くとて、例のステッキを探ねると影も形も見え無い。ハテ不思議と人を呼んで、捜さしたか遂に行方不明!

で、熟々考へて見ると、奈うも彼の博士が歸りしなかに持て往つた様思ひれてならないので、成るべく感情を害しない様、それとなく杖のこを尋ねて遣ると、一向に存じ申さずとの返事だ。

けれども確か博士が歸りしなにか探して往つたのを見たといふ者もあるのだ、わざわざ訪問してよく話しをしゃうと往つて見ると、不在をつかつて奈うしても逢は無い。

其後といふものは、いく度手紙を遣つても返事無く、尋ねて往つても居不在ばかりで到頭要領を得ず仕舞つた。つまりは音信不通となつて仕舞つた。

恁んな具合で數年は過ぐされたが、氏が歸朝した翌年の春からである。さしも今迄音信不通であつた彼の博士からの年始状があつて、其次便の手紙の端に、

「當地御滞在中、御所望申上候觸鯨の作物は、當時の紀念として、永く拜領仕置候……」これを見た氏は苦笑一番して、

「紀念として、永く拜領仕置候もないもんだ……併し外國人にあつちやかなは無いで！」

首つたけ惚れたステッキ捨て兼ねて

捨鉢主義の記念分捕

### △丸山晚霞氏と膀胱麻痺

よく画家を引張出すやうであるが、氏も太平洋画會の一員で、秀才の聞えある人だ。が、至極眞面目な方で、みれといふ珍談奇話は少ない。併し今爰に紹介するのは、氏が以太利漫遊中の出来事で、この人に取つては珍無類の話だ。

元來氏は船が嫌の方で、随つて航海中は半病人——とまでは往かずと

も、確に船負をして、食事も碌々やらねば、便所へも三度に一度しきや往のぬ。

處で或る日のこと、急に小便づまりがして、到頭一晝夜といふもの便所へ往かなんだ。

元々いへば船暈をして居る處だから、便所へ往かないのは勿性の幸福であるのだが、唯だ一時の小便づまりで済むで呉れば此の上も無いけれど、どうやら病氣らしい心地がするので、氏にとつては中々氣が氣で無い。

其所で船附の醫者に診て貰はうと思つたが、何分英語に無器用な身は、詳しく容態をいふこともならず、さればとて病名でも判つて居れば、そ

れをいふといふこともあるのだが、然る専門語と来ては、猶更ら不得意なので、氏はいろいろ苦心して、行李の中から和英辞典を引きすり出すやら、同船中の友人だの、他の日本人だのに無心のふて、それ等の持つて来た會話書や、幾種もの和英字書を借りて来るやらして、引つ繰りかへし押し繰り返へし尋ねても、それらしい言葉さへ見當らぬ。兎角する内よその翌日も経ち、三日目も暮れて、遂に三晝夜といふものは小便が一滴も無い。

流石の氏もこれには閉口して、最う我慢が出来なくなつたので、思ひ切つて醫者の居る部屋へと往つた。

けれども其人の前へ出ると、一層自分の英語に不得意なことが氣になつて、知つて居る言葉までが容易に出て來ぬ。

これではならぬと煩悶に煩悶して、病氣だから診て呉れと迄は覺束無くも言つて退けたが、さて容態は奈うして言はうのと、又た煩悶したが、今度は身振手振で、繰返へし繰り返へしそれを述べる。けれども對手の醫者には一向に解せなんだ。

双方共ニ随分氣を長く持つて、僅く小便がつまつたのだといふことが醫者にも判つたので、先生首肯いて診察をしたが、これはブラーゼンレームングといつて、日本で所謂膀胱麻痺だ。

醫者はこれを知れて笑ひながら、

「何ア、御心配なさる事はありません。散薬を進げますから朝夕一

包つゝ召上れ……原因ですか、それは貴方が久時放尿をこらえて居てな  
さらんかつたからですよ。」

斯くてこの病氣は事無く済むだが、氏はこれに懲りて、それからい  
ふものは多少波風のある日でも、思切つて便所へ出掛けるといふ風で、  
歸朝してからも人に聞かれる度に、

「さやまう、あんな苦しかつた事はありませんでした！」

小便もつまり言葉もゆきつまり

### △巖谷小波氏と影武者

巖谷小波氏が伯林滞在中には、随分面白い話がある。

これは其逸話の一つで、併し強ち小波氏自らが影武者を使つたのでは  
無い、つまり恚うだ。

御存知の通り、小波氏は伯林の東洋語學校に教師として聘せられ、彼  
の地に赴いてからといふものは、非常な人氣役で、忽ちよしてエス、イ  
ツヤなる名は、交際場裡に隠れ無いものとなつた。

恰度その頃、この伯林へ来て居た、某といふ大尉どのがあつた。この  
大尉殿極の眞面目物で、来た當座といふものゝ、本國の故郷の事はかり

思つて、毎日毎晩惜げかへつて居たが、其頃は、小波氏などが、いろく  
 に慰めて、方々遊山に連れ歩いて、一向に浮かず、隙さへあれば溜息  
 ばかり吐いて居るといふ始末で、同胞の人達も持て餘して居た程であつ  
 たのだ。

處で、滿一年経つか経たない内に、この大尉殿大の浮れ男となりすま  
 して、飛んだ伯林通になつて仕舞つた。

それから程経つての事、小波氏は唯有る湯治場へ出掛け、元より二  
 週間は滞在する筈であるから、静かそうな宿屋へ行き、

「當分危介になり度い！」と案内された座敷へ通ると、程無く番所が遣  
 つて来て、四方山の話をしかけた。

すると段々話柄が日本の事へ移つて、すると番頭は思ひ出したやう  
 よ、

「オ、そういへばつひ申し忘れて居ましたが、唯今手前共にも日本の  
 方がね見ねになつて居ります、大方貴所も御存じの方で御坐いませ  
 う！」との事に、小波氏はそれ幸ひと、

「へエ一人かい？」と尋ねて見ると、

「S、え、ね二人………何でも新婚旅行をなすつてゐいでこのやうで  
 す。」と返答。ハテ變だ、今この伯林に居るもので誰れも結婚した者  
 は無い筈だがと、

「名は何とさつたね。」と聞き耳立てると、番頭はしたり顔で、



「確かに御存じの筈で御座います。エ、と、伯林の東洋語學校の教師  
で、巖谷小波と仰有る方……貴所御存じで御座いませう。」

疊かけられて、小波氏はその名を騙る不届奴、イデ面の皮を引んひいて呉れうと、内心その手配も急がしくも、番頭にはさあならぬ体で、よき返事を與へ、自分の名を詐つて居る、小波氏の影武者といふのをよく探つて見ると、意外も意外、その巖谷小波氏こそ例の大尉殿で、新夫人といふのは、高うは申されぬが恥しながら、これも矢張日本から出稼ぎに来て居る、醜業婦の一人であつたので、小波氏は獨眉をひそめて、

「やれ、乃公も情無いものになつてしまつた！」

其後間もなく、大尉殿は眞物の小波氏が遣つて来た事を知つて、尻尾を出さぬ内と何處へかドロン！

名前をば騙らわしめて影武者を

○○○○○○○○○○  
○○○○○○○○○○  
○○○○○○○○○○  
○○○○○○○○○○

△巖谷小波氏と玩具

少年文學の大家として、小波の叔父ちゃんなる名は、日本全國津々浦々の少年子女にまで知れ渡つて居る氏は、流石に少年を伴として居るだけに、大の玩具好きで、その以前、日本に居る時分からして随分種々な玩具を取り集めて、それを樂みとして居た。處で氏は前にもいふ通り、獨逸伯林の東洋語學校から招聘され、彼地へゆくことになつた恰ど其時、氏の家は玉の如き男子を擧げられたので、氏は大喜びで心残りながら任ふ彼の地へと赴ひいた。すると、又た始終にその兒供のことが氣にかゝるかして、手紙の度々

には必らずその事を書いて寄して居られたが、やがて例の如く伯林の玩具屋を漁り始めた。

と、彼れ此れと段々漁つて往く中、或る日のこと、とある玩具屋へ這入つて種々玩具を出さして居ると、その番頭先生、自分では一端氣を利かした積りで、

「して、れ幾歳位のお見様で御坐いますか？」と尋ねた。すると氏はすましたもので、

「何アに、一人は二歳だが、一人は三十と二歳だ！」と例の洒落。併し番頭にはそれが通じ無るので、

「御冗談を……三十と二歳なんてお見様が御坐いますもので……」

「いや、あるよ。その一人は私の子息で、一人は斯くいふ私ちや！」  
言へば番頭ハタと手を打つて音肯さ顔よ、

「な、なアる程……それでは貴所のは此がよろしう御坐いませう！」  
と、番頭先生も洒落る氣で、クリケットの用具を出しかけて来た。

けれども氏はそんな大人の玩具に用があるの無いのだから、矢張そ  
なたは見向きもせず、

「なアに、私は矢張この方が好い、これを貰つて往くとしやう。」と、  
ある人形の玩具を取られたとやら、これも愛嬌の二とらふへし。

玩具屋の辛主をもちやにじやれて居

### △巖谷小波氏と切手乞見

これも氏が伯林滞在中の話であるが、一日氏は近郊散策を思ひ立つて  
とある城外の村へと志した。

處が、その日は何事であつたのか、非常に澤山の兒供が集つて、大騒  
ぎをして遊ぶで居た。

氏は前にもいふ通り、大の兒供好きであるから、覺えず立止まつて、  
それ等の兒供が戯けて居る様を、飽すも眺めて居ると、臆中の一人は、  
氏の居ることを見附けて、

「ヤア、外國人が来た」と、いふかと思ふと、

「ム、居るく」と、何人とも數知れぬ程の兒供が、ドヤ／＼と氏の處へ駈けて来て、氏を取捲いて仕舞つた。そして極る組末な獨逸語で、  
「叔父さん、郵便切手を呉んなー」と眞先の一人がいは出すと、他れものも異口同音よ、

「叔父さん、僕にもね、僕にも……」と果ては誰がいつて居るのか判らない位ワ／＼と叫び出す。

大抵のものならこれでも耳を聳するやうなので、閉口して逃げて往つてしまふのであるが、流石に氏はそんな人で無い。少年に對しては飽まで親切で、熱心であるのだから、路傍の石に腰を下ろして、恁んな村童でも外國の郵便切手を貯めるなんぞといふ、殊勝な考へを持つて居るの

かと、例のニコニコ貌で、

「ム、おげるく。昔んなに上げるが、今爰には持て居ないから、欲し者は宿迄貰ひにゐいで……」

いふ言葉の了るか了らぬに、又たも兒供達は叫び出した。

「ム、そんなられ錢でいゝやー」

「僕もそれ錢をお呉れ！」

「僕にも……僕にも……」と、今度は皆が銀の方を強請る。

氏はそれにもめげず、

「さうか、そりやれ錢でも上げ無いことは無いが、お錢で郵便切手でも買ふのかい？」と、まだ何所迄も外國の古郵便切手を買つて、それを

貯めるものと思ひ込むで聞くと、兒供等は首を横に振つて、

「ウ、ム、お菓子を買ふのだい！」

爰に於て、初めてこの兒供等が外國の古郵便切手を貰ふのは、それを貯めるのでなく、錢にかへて菓子を買ふのだと知れ、如何な氏でもそれには愛想が盡きたと見え、

「お前等の切手を欲しがるのは其様なことなのか、それでは切手は愚、お錢も上げられ無い。さよなら」と、苦り切つて、スマコヲ行を過ぎ、

「獨逸にも恁んな切手を見が居るかなア！」と長大息して、其まゝ引つかへし、郊外散策もれちやんにして宿へ歸つて仕舞つたとき。

お錢くれとすがるを振りきつて行

### △士肥春曙氏と襟飾

川上音次郎子の話が出たから、追手といつては甚だ何だが、こゝに氏が洋行中の珍談を一つ紹介しやう。

知る人ぞ知る。氏は川上一座の立作者として、前記の音次郎子等と歐米の諸國を打ち廻つた人であるが、その間に彼の地の有名な俳優も逢ひ、一二に數へらるゝ作家とも會見した處から、自然その風になづむ様になり、襟飾なども横に附けるといつた風で、兎に角ハイカラーの生粹

を學ぶに至つた。

處で、氏等の一行は、各國を巡業して、露國の大都サント、ペテルブルグに入る。

と、兼て評判があつたことでもあるから、その人氣は又た非常で、同地なるわが公使館員等は、盛んに歓迎した。

恰どその日のことである。氏は導かれて公使館の一室に入り、館員の誰彼と會談を試したが、他郷に入つて同郷の人に逢ふのだから、未だ曾つて一面の識も無かつたもの同士の會合とは見えぬ位、互ひに隔の垣も取り去られて、心置き無く語つた。で、中には佛蘭西に往つて居るもの、消息を聞くもあれば、獨逸に往つて居る誰は奈うして居たと尋ねるもあ

つて、言葉はそれからそれへと馳せ、いつ盡くるとも知れぬ程であつた。すると突然、館員の一人が、親切顔に氏の襟飾を指さして、

「土肥さん、貴所襟飾が横になつてますよ、直してあげませうか。」と言ひ出たので、氏は大いに閉口し、流石にそれと白地にも言ひ兼ねる所から、

「さや、なにを捨て置き下さいまし。これが反つて自由で……」と尻込みすると、その人は氏が難有迷惑で居るとも知らず、

「なアに御遠慮には及びません。こちらへ來なさい、見とも無いですよ。」

茲に至つて氏は絶体絶命、最早その迷惑な御親切を蒙らなければなら

無くなつた。

「恰もよま、この時席に居合した某といふは、巖頭まで佛蘭西の方に居た人で、歐羅巴全土の人情風俗を一呑みにして居るといふ程の男として、この態に見兼ねたものか、横合から口を入れて、

「君、それは無用の親切といふものだ。當地ではそうで無いが、巴里邊では、芝居の作者は必ず襟飾を横にして居るものだ。つまりいふと襟飾を横にして居るのは、彼の社會での粹といふもので、土肥さんがそれをして居られるのだから、敢えて君の御心配は御無用の方がよからう。ね、土肥さん」と代つて説明をして呉れたので、まづはこの虎口を脱るゝことが出来たが「ね、土肥さん」の一言には氏も甚だ恐縮して、

「何、そんなわけでも無いですが……」と至極曖昧な返事を呉れ、ろの場はそれで済むでしまつたが、夫からといふもの、この公使館に土肥式といふ襟飾の附け方が流行し、今よ一場の愛嬌話として、この事が相傳へられて居る。

襟飾と襟飾金(SOUSO)のSILVER

△井上甚太郎氏のノウ、イエス博士

香川縣選出代議士井上甚太郎氏は、久しく農商務省の商工會議員として、遠く歐米の諸國を巡遊した人だ。が、いつも通譯の二人や三人連れて往かぬことは無いので、自分に外國語に通じなくも、さのみ不便を感じなかつたので、別々英語一つ勉強したことは無かつた。

と、或る時のこと、その通譯を使ひにやつて、自分一人旅館に居ると、所の新聞記者が尋ねて来た。

給仕が名刺を持つて来たので、何かは知らないが、出ていつて見ると、一個少壯のハイカラ紳士が應接室に待つて居る。併しその人が何職業か又は何用で来たのかさへ判らぬので、お定まりの握手だけはしたもので、さて何と云つてよらやうか何御用でー！一つ出なうので、黙つて其人の顔を見て居ると、客は堪らずわれから切り出して話し始めた。

「否、然！」とばかり云つて、ひたすら通譯の歸つて来るのを、切腹間際の淺野内匠頭といふ見柄で待つて居ると、やうくのこと由良之介なる通譯が歸つて来たので、やれ嬉しやと早速に通譯を命じ、段々話を聞くと、その客はさる新聞の經濟記者で、日本の經濟近況を聞きに来たのだとの事に、氏は漸く安堵の思ひをして、それから大得意で喋々數千言を費したが、それからといふもの、その新聞記者は、氏を密にあだ



なして、ノウ、イエス博士とらつて居たとやら。

〇〇〇の空より外に知らぬ身は

たゞ通籍の〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇を待つ

△井上醫學博士とヂストマ

代議士井上其太郎氏の養嗣子で、千葉醫學専門学校の教授なる井上善次郎氏は、曾つて岡山の高等學校醫學部に教鞭を執つて居たころ、同地方の特産ともいふべきヂストマを研究し、爲めに醫學博士の學位を得た人であるが、千葉の醫學専門學校へ轉任してから三年程経つて、獨逸へ留學を命ぜられた。

處で爰に面白い話柄がある。

一体氏は大の無頓着家で、人物も洒落な方であるが、自ら研究してそれ精しい爲めか、ヂストマといふと非常に恐れて、よくこれが豫防衛

生に努める人だ。

あの五尺裕かな身格で、而かも獨逸向といつた風の肥満男でありながら、目にもたまらぬ微塵にひとしきりパチルスを恐れて、これが豫防を嚴にする、一寸聞く可笑なやうでもあるが、よくよく考へて見れば、千里の堤も蟻の一穴からとか、成る程この位に嚴重よせねばゆかぬのかも知れぬ。

いや、餘談は扱て置き、氏に博士の學位を與れた利生の本尊なるチスマに就いての話といふのを語らうなら、それは憊うである。

恰も去年の夏の事であつたが、氏の夏季の休暇を利用して、伯林から百哩餘も離れた片田舎へと旅行したことがある。

この邊り一体に沼、湖などのある處で、自然の景色に富むで居る處から、氏は少時足を此處に止め、保養券々、夏の暑さを避けやうといふので、とある家に投じて、その一室を借ることに約束した。

その家といふのは、日本ではさう農家のやうなもので、後園には様々の野菜もあれば、果物もあるといふ風で、料理は妻君が自慢とやら、それかわらぬか料理番一人も居ず、たゞ僅々皿洗ひの男が一人備つてあつて、これが萬事下働らきをする始末、併し氏はこれが結局氣樂だといふので、一週間何程の定めで二週間ばかり滞在すべく約束をした。夫から二三日の間は、互ひに遠慮勝で、別段打ち寄つて話しをする事らふことも無かつたが、四日経ち五日経ちする中に、次第に中垣が取り

去られて、果ては家族同様其團樂にも加はる程になつて仕舞つた。  
 其所でいろくな話が出て、主人の語る處を聞くに、この界限はそ  
 うでも無いが、この次の村へゆくと、非常にチヌトマが盛んで、自分も  
 そこへ往つて居た折、キャベージを好んで喰た爲め、チヌトマよかつつ  
 て、久しく苦しんだから、今以つて野菜類は自園に作つたのを御用居る  
 とあつた。

と、氏はイヤ驚いたの驚かないのつて、其晩妻君が自慢で拵えて呉れ  
 た、キャベージ巻きも強めて辞退して喰はず、翌朝は勿々に行李を片附  
 けて、急に用事があつたのを思ひ出したからと、這々の躰で逃げ出した  
 が、その足で直様伯林へ立歸り、早速に自分の糞便を顯微鏡にかけて見

るやら、あらゆる試験をして、幸ひ未だ傳染して居なかつたことを確か  
 て、ホツとばかり胸撫で下ろしたが、うの事を思ひ出すとツツとすると  
 て、それからといふものは、決して知らぬ土地でなど、無暗に飲食はし  
 なくなつて、

「まさか伯林近傍にそんなことは無からうと思つて居たにいや最う危  
 険千万のことだ。君等とても充分用心せんといかんよ。」

と逢ふ人ごとよ戒しめて居たとやら。或る意味でいふと、自分に今日  
 の地位を興へて呉れたチヌトマであるのに、氏がこれを恐ること斯く  
 の如くなるを見れば、寧怪しく可笑いことでは無からうか、呵々。

パナルスと同居は御免あひへるりん

### △稻田周之助氏の印度通

帝國大學に籍を置いて居る頃から、朝氣慢々人を凌駕し、遂に教授等の愚にもつかぬ講釋を聞くに絶えずとして、法學士の學位を頂戴する迄もなく、われからそれにお去らばを呉れて、今や東京日々新聞の紙上に万丈の氣焔を上げつゝある氏の、流石に今以つて洒落の書生氣質なり、往年印度地方を漫遊して自ら東洋のキツプリングを氣取る。

人若し氏に叩くに印度の事を以てすれば、氏は曰ふ。

「さうだね、最初孟買へ着いて、一番甘かつたのはアイスクリームだつたよ。何に、別内内地のと變つて居はせんけれども、時が時だから第一珍らしくつてね……何、何時か？ 一月の十二日だつたもの！ 正月の十二日といつて見玉へ、寒くつて火爐の中へもぐり込むでる最中ぢや無いか。そんな時分にアイスクリームを出されるのだもの、よし處が處であるにしても、珍らしくからうぢやないか。それからね、思つたより安かつたのは、黒奴の賃錢で、何しろ印度は彼いふ熱帯地方だらう、いくら日本あたりでは酷暑で雪が降つて居ればつて、到底も白晝外へなんぞ出られるもんぢや無い。そこで僕はホテルの寢床の中へ横臥で、黒奴に團扇様のものであふがしたと、ことわつて置くが、寒暖計は華氏の百二十

度からで、それでも戸外の熱い風を入れてはといふので、窓は皆密閉して仕舞ふし、然もその窓の戸でも壁でも二重なのだがね、恁んな中でも不動として居さへすれば、思つた程堪へられないものでも無いよ。奈うだい、そんな中で不動として居る自分さへ随分楽な方では無いのに、黒奴は日の暮れる迄あふいで居て日が僅か三十銭だ、恐らく是れ位安い報酬又とあるまい。引きかへて夜はまた非常な寒いね。實際、涼しいの範圍を通り越して、寒いも寒い、晝が酷暑で夜が酷寒だ。それでも夜の光景は中々筆紙に盡くし難いね。嘘だと思ふならまた往つて御覽なす。物は何でもためしだー」

蓋し、氏の印度通は、アイスクリームと黒奴と、この晝と、及びこの

夜とだ。或る人はこれを評して、東洋のキツアリングは喰ひしん坊で、客ん坊で、寝坊で、三坊揃つて、三々がくろん坊だといつて居た。何が何やら灰般よはさつぱり判らず。

天時印度のくろん坊をばりすまじ

△松本君平氏と絶交

ハイカラーの張本を以て自らは元より、人もゆるして居る氏は、四時  
もわりさうなカラーを附けて、音羽屋式の稍反身に、すまし切つて居る  
やうなものゝ、その北米の天地に古参の在米日本人として得意の風を吹  
かして居る頃は、随分と悪戯をしたものであつた。

就中、氏がこの悪戯の爲め、絶交を申込まれたのは、憊ういふことで、  
それはある陸軍の士官であつたが、氏がこの人と知り合ひになつたのは、  
さる珈琲店で言葉を交はしたのが抑々で、其後しばらく往復して、尤も  
日ならず二人は舊知の如く親密になつてしまつた。

すると或る日のこと、その士官殿の處へ一通の封書が舞ひ込むで来た。  
披いて見ると艶かしい懸想文で、

「……………ある日の午後、〇〇の公園にて御姿を餘所ながら拜し、餘りに  
御ゆめしく、一度おめもじの上、親しく御物語りも致し度、就ては此の  
リボン差上げ置き候まゝ、今夕六時これを左の襟側へ御着け下され、〇  
〇公園のワシントン銅像の下迄御いで下され度く、さすれば彼方より貴所  
様を待ち焦れ居り候乙女、そのまへより御待ち受け致し居るべく候。」云  
々々とある。

そこで士官殿は恐々なから往くことにして、夕暮れを待つて居ると、  
遂に午後の五時とはなつた、士官殿は最うよい頃と宿を出様とする。

出會頭に松本氏がやつて来た。

「や、お立ち入り？」

氏は飽く迄寛り構へ込で居るが、士官殿氣が氣で無い。しばらくモ  
シトクして居て漸くに、

「松本さん、私甚だ失禮ですが、一寸出掛た用事がありますから……」  
と切り出し、氏を歸へすと直ぐ、辻馬車を驅つて〇〇公園にゆき指定の  
銅像の處へ来て見たが、未だそれらしへ影も無い。サテは時刻に延引し  
て、それで歸つてしまつたのでは無からうかと、どつねいつとして居る  
と、時分を見はからつて松本氏らは、散歩にでも来たといふ風で、二三  
人のものとやつて来た。士官殿はそれと見るより突と去つて氏等をやり

過ぎて、さて一時間ばかりも待つて居て見たが、遂に何にも来ないので、  
ガツカリ氣拔けかして、悄悄宿へ歸つた。そして今一應とその手紙を見  
ると、奈うやら見覚えのある手跡に、段々考へて見ると、松本氏の悪戯  
らしいので、探つて見ると案の定それであつた。

それを知つた士官殿は、イヤ怒るまいことか、烈火の如く憤つてペン  
を執るより早く、

「絶交！同胞の一人を欺き、弄びたる君の所爲、甚だ悪むべきものなり、  
依つて今より以後、長く君との交りを絶つ。今日までの親切と、他のあ  
る意味の親切と、この二つは二様に感謝の意を表し置く。」

この手紙を受取つた氏は、流石に苦笑して「先生、どうと怒つたな」

とらつて居たが、それからといふもの、二人は遂に路傍の人となつてしまつて、歸朝後も赤の他人で今に意が解けぬやうな。意が解けぬといへば、氏はこればかりで無く、他にもそんな悪戯をして、友人から絶交を申込まれたとやらで、知る人は又たかと別に珍らしくも無がつて居る位だとか、まさかそれ程でもあるまいが兎に角……。

君平に御免といはず絶交し

### △長谷川四迷氏と國事探偵

日本で露國の軍事探偵だと思ひ誤られた人があるかどねもへば、露國で日本の國事探偵だと思ひ誤られる人もある。而もそれが日本では長田秋濤氏で、露國では長谷川四迷氏であつたのだから可笑しいではないか。

今更らに御紹介申す迄も無く、氏は二葉亭四迷といつて、久く日本の文壇に、露國文學の紹介者としてその名隠れ無かつた人で、又た東京外國語學校の露語教師でもあつた。

處が昨年行李を整へて、露國漫遊の途に上り、彼の國の民情風俗等を



親く觀察して居る。而して筆の立つにまかせて、彼の地の新聞紙上に、種々なものを寄稿して居たが、今年も入つて、東洋の風雲穩かならず、兎角日露の間、戦争が開かれるやうに噂するものがあるやうになつたので、氏はその彼我に利なきのみならず、寧此れが双方の大いなる損であることを縷説して、百方平和主義を主張して廻つた結果、遂に誰いふもなく國事探偵と思ひ僻められ、それかと云ふものゝ探偵等に附けまわされた。

併し、そんなことを無性、氣にするやうな氏では無いから、初めの内は鼻であしらつて、

「吝な根性の奴等ばかり揃つてるもんだ」と例の氣焔万丈であつたが

露國人の事であるから、それと注意し出すと馬鹿に執念く、殆んど一擧一動にも油断をしないで、五月蠅く附け廻すに、

「これでは困る。」と、氏も流石に恐縮して、今更らゝ物言へば唇寒し秋の風だと、この手拗足拗の出来たのを嘆つて居るが、臆のこと、その注意は干渉と變つたので、

「黙つて居れば奈んなことをするか知れぬ一番度膽を抜いて遣らうか」といふので、自ら揚言して國事探偵だと觸廻つた、これには流石の露人も呆氣にとられて、段々探つて見ると、全く自分等の杞憂であつたことが知れたので、果は大笑ひで済むたが、一時は面白い旅行も出来無いとて、氏は大こぼしにてぼして居た。

流石卯の年だけ耳が長過ぎて

腹の目ならぬ腹の中巻

### △橋本圭三郎氏と祖神論

大蔵省專賣局書記官橋本圭三郎氏が、歐米巡察中にも、随分面白い話がある。こゝに掲ぐるのはその紐育滞在中の事實で、一夕氏は同地の某煙草製造業者と會見した。そして要談のすべてを了つてから、四方山の話をして居ると、客は氏を顧みて、

「一体貴所のお國は誰が建國されたのです。日本の先祖は何方で……」

……」と尋ねはじめた。

そこで氏は、柄に無い歴史沙汰でもあるまいといふので、たゞ何かなし、

「日本の先祖は天照皇太神です」と答へると、客は耳なれ無い名であるから、聞さうならうな良をして、

「でその天………なんとか言ふ方は奈んな方ですか。」と、折返へすと、

「それは神様です！日本は神の國ですから、その建國者も神なのです。」

「へえ、でその神と仰有るのは新教ですか、舊教ですか。」

「日本の神は基督教のやうに新舊の區別とありません。つまりわが國は天照皇大神といふ方が創められて、それから今日まで、万世一系の天

子を戴いて居るので、今上天皇もその神様の御末裔なのです。  
「なる程、ではつまり羅馬法王のやうなものなのですね。」  
客は獨り合點して、したり貌をいふので、氏もこれには張合ひが抜け、  
獨り横を向して、

「縁無き衆生は度し難しとはよくいつたものだ！」

法王の言はれ違々の昧で逃げ

### △池邊義象氏の画美人論

元の小中村義象氏、曩に池邊の本姓を復して、一時世に兎角の取沙汰  
あり、漸く聞くに堪はずなつたものから、久しく墳墓の國にそむいて、  
歐米の天地に悠遊日を送つて居た。

その頃以太利のさる處から、一片の繪端書を故國の友へ送り、  
「こゝに見らるゝ如き美しきもの、當地にも多々これあり、流石に風  
情わりど見申し候へども、實物はまことこれにもまさりて見え候ても、  
なかく思はしく、そはこの國の美人達より、われ等の最も嫌ふべき腋  
臭のものと多きゆゑに有之候。繪よかける女を見て心を働す人を、嘲み候

人もあれ、小生は繪にせる美人の方、寧ろめでたくと唯今は思ひ候」云々を認めてあつた。

何分繪端書の餘白にかゝれた文字で、氏がこの述懐が、琴柳折花の餘になりしか、その邊までは天機漏らされて無いが、氏の画美人論は、近く同人間の茶話に上つて、これも愛嬌の一つに數へられて居る。

紙の上へ句はねはなぞ却々に

はなもちならぬはなに勝れり

### △中村不折氏と葺

呉竹の根岸の里に画堂を作り、久しく世に一技の才筆を弄ひつゝあつた中村不折氏、曩にその紙筆を携へて佛蘭西に入るや、例によつて氣焔あたるべからず、ルーブルの博物館に古名家の作品を見て、直よその妙趣を覺り得たとし、巴里の都内にも、猶且フグランドホテルの如き汚い宿屋のあるを罵つて「お早うー」一つ知らぬ身で、忽ちにかどの巴里通になりおぼせた氣で居たが、流石に内心自らはそら程よゆるして居ず、ある晩の事、友人と連れ立つて、公園を散歩して居ると、又候他の友人がやつて來、こゝに三人落合ふたので、新來の友は氏に向ひ、

「奈うだ、カフェへでも往かうか」といひ出すと、氏が諾否をいふよりも早く、連の友がそれに同意し、氏を顧りみて煽動あげるやうにせついで、

「さ、君は新参ながら中々巴里通だから、然るべく案内し玉へ！」  
と今度は二人してせたぎ上げ、遂にとある店へと這入つた。

すると先の友人は、何もかも呑み込むで居るといつた風で、それくに食物をわつらえ、三人はこゝに少時の會談を試みた。

斯くて最後に、その友は毒を命じたので、氏は驚いて、モジ／＼して居た。そして注文の品が、大皿に盛られて來ても、何がなし氣になる事があるの、それが甘く咽喉部を通らず、二人の友が平氣で喰べて居

るのを見て、内心ヒヤ／＼して居ると、その友等は見る／＼大皿の毒を悉皆喰ひ盡して、猶漸らしぎ一皿を命ずる。

氏はそれに堪りかねて、密かにその袖をひく。

「オイ、そんなに喰つていゝのかい？」

「大丈夫さ、この位のもの三皿や四皿喰つたて、身代限り仕つるやうなれ互ひでも無いぢやないか。」

「いゝや、ぶうで無いて。誰だつたか知らないが、この巴里で毒をしたか喰つて、大層とられた人があつたぢや無いか。」

氏が何所までも劍呑を踏めば、二人の友は半ばもいはせず首を縦に振つて、

「そりやそうさ。冬の極寒に梅を喰はうなんて謀反を起せば、敢えて巴里のみならんやだ、日本だからつて目の玉の飛び出るやうなる金子を取られるのは當然まへだ。安心し玉へ、今頃なら四皿や五皿喰つたつて大丈夫だよ。」

言はれて初めて安堵した氏は、

「ふ、さうだつたのか。よし、夫ぢや喰べやう。何だ、つまらない心配をして仕舞つた！」

今更らに愚痴をこぼして、これまでの氣色に引かへ、我武者に喰べ出したので、それでなくも變な人だと注意して居た給仕は、日本語が判らぬので、三人の間に奈んな語が交換されたかも知らず、いたく不思議な

眼をして氏を見るので、二人の友は柳揄半分、

「さうだ、君の巴里通も猶少し研究を積まんと駄目だな。」

言はれて氏も仕様ことなしに、

「アハハハハハハ」

○○○の思ひ出にそんなら喰はうと

ふふりつ

△戸水寛人氏の日露比較説

法學博士戸水寛人氏、曩きに露西亞を漫遊してダリーリニイに到り、長谷川四迷氏等と一所會す。談、偶々西伯利亞鐵道のこと及び、氏案を叩いて論じて曰く。

「大體日本人の仕事は何所までも島國的で、片端からソクソクやつて往く方だ。が、見玉へ一露西亞なんぞのやり方はザアツとろの大脈を仕上げ、而して後に固めをつけてゆく。だからずんづ結果を見ることが出来ないやうで居て、その實意外早くその事が仕上がる、恰といふと、露西亞のは城の外廊から拵えていつた熊本城の流義で、日本のはこれと

反對に、内廊から仕上げていつた福岡城の流義だ。だから見玉へ、徳川から注意をされて外廊を粗末にせはやらんやうなことがしばしば出来ぬのぢや。僕は福岡流の迂を學ぶより、熊本流の敏を賞するね。云々。人これを評して戸水式、熊本主義の日露比較説といふ、果して氏は首肯して居るかどうだか。

〇〇〇〇〇〇のどが國風なうれとみす

〇〇〇〇〇〇の法螺をよく聞

### △井上公使の已惚鏡

是はつひ三四年前の話であるが、在伯林の各國公使は、年賀の祝詞を述べにど獨逸の宮廷に赴いた。

處が獨逸皇帝は、例の愛嬌よく、各國公使の手を握つて、その新年の賀を受けられたが、奈うしたものだつたか、某國公使の前へ來ると、その出した手を見向きもせず、突と進んで、次席に居た井上公使の手を握られた。其所で公使の大得意になり、公使館へ歸へると直ぐ、屬僚のものへ今日これくだつたと自慢半分に話して居ると、それが遂に伯林の外交社會で問題とまでなつた。

夫ゆえ氣の利いた某國の公使等が、獨逸皇帝の前へ入つて、その理由を伺ふと、皇帝は別よ意とさるゝ所も無く、

「何アに、實は〇〇公使の長髪が氣に喰はむかつたものぢやから……」  
とのれ答である。

これでこの問題も落着し、斯くと聞いて來た館員の一人が、皮肉もその事を井上公使にいふと、公使は平氣なもので、

「ム、それもそうだつたか知れないが、それは皇帝が如才なく逃げられたのさ。嗚、さうだらうぢや無いが、君は何と思ふ?」との御質問で、その男も避易し、陰へ廻つて人に語らく。

「如彼已惚が強くては何ともはやだ!」



己惚の鏡見て居るにほん棒

### △安藤謙三郎氏と敵愾心

米國商業學士安藤謙三郎氏、昨夏紐約六十四丁目デラニー方にあり。一日新紙を閲してあるに、中に左の記事があつた。

○古倫比大學の清語教師招聘 曩にラング氏は十萬弗をコロムピヤ大學に寄せ、支那語科を設立せしめし事は、世の既し知れる處なるが同大學へ今度フレデリック・ハース氏を聘し、該科の講座を擔任せしめたり。氏は彼の有名なる英國人にして清國政府雇稅關總理たる、サー、

ロバート、ハート氏の幕下にあり、清國に滯留すること二十又七年、其間熱心支那語の研究に力を致し、遂にその淵奥を極めし人にして、現に支那に關する數種の著述さへあり、その珍蔵の書籍にても今や七千部に達せるを以つて見るも、その如何も是が讀破し日子を費せしやを知るに足らん。

氏はこの記事を見ると共に、長大息する所があつたが、後人に語つて曰ふ。

「日本人は敵愾心があるやうで無くつていかん。見玉へ、日清戦争の當時なんぞは彼れ程にワイ〜いつて居ながら、コロムピヤ大學に支那語科が出来たつて、誰一人進むで講座に上ろうなぞといふ執心者はありや

しない、そして同じ東洋の言語が、とんとかけ離れて居る英國人よよつて教授される事になつても、何等の反應も無く、一向空々寂々だ。敵愾心なんてものは、戦争の時ばかり起すものと思つてゐるのか知らず？」

そこでその友は反問して曰く。

「ぢやなせ君と運動しなかつたのだ？」

「僕か……僕はうの、他に目的を持つとるでなア」

「さ、そこだ。君も目的を持つれば、他の人だつて同じことさ。それ實際運動したからつてハース氏の學力を有するもので無いとだめだからなア。まア、敵愾心も敵愾心だが、修養のことさ。」

「併しその修養も敵愾心あつてのことだらう。」

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。君は中々負け惜しみが強いよ。」

「無論さ、負けるのを何とも思はんやうな奴は、生存競争の社會に立つて、優勝の地位は得られんからな。」

「ハ、ハ、ハ、では君の敵愾心はイクウォール負け惜しみのだな。」

「それでもいゝ、兎に角劣敗の地位をどらぬやうにするのが何よりだ。爰に於てか氏の敵愾心は、負け惜しみとなつてしまつた。」

嫌ふのもしなにころよれお隣の

娘は遂に誰かゝるんびや

洋行  
大産  
高襟  
珍譚  
終

附  
録

當世ハイカラー修行

緒  
論

大和灰殻編

時の古今を論せず、洋の東西を問はず、なご、今更らめいて言ふまでも無いこと、エヘン箕盆、オホソ酒盃と、山椒のピリ、とさの利くやうになるには、それ相應の修行を積まなければならぬものとやら。  
されば藝者には藝者相應の修行あり、役者には役者相應の修行があつて、而うして後にあらざれば、その……者にはなれ無い。

奚に近くハイカラーなるもの紳士淑女の間に流行を來たし、郵便船の度々に所謂洋行歸りの先生が、その新形珍柄を輸入し來たれば、居ながらにして之とそその倅を競はうといふ、歌人俳諧者流も出で來り、これが修行といふもの、この間にも行はれて、世はさまざま、思ひ／＼に修行すれど、鍋蓋に押へつけられし程の苦勞せねば、宮本武藏まで上達覺束無く、さりとて人よも問はれぬ所から、心密かと思ひを焦す輩ありとか。

いらざる編者のれせつゝいかは知らねど、その人々が栗にもど、サット編たるハイカラー修行、頭の先から足の先まで、かいつまむで、先づはあらく／＼かくの如し。

### 第一 衣食住

粗より細に入る、文章軌範の筆法を學び、まづ衣食住から説き起さうなら、サットしても恙うであらうか。

春夏秋冬、いつよかぎらず、日に少くも三度は服を改ためねばならぬ、第一朝がモーニング、コート、これは秋、冬の二季が大抵黒で、春夏の二季が色變り。それから午後、會食の折がディナー(晝餐服)で、晩方がイヴニング、コート。猶この上に夜會へでも行くとか、目下日本には無いからいゝやうなもの、オペラでも見に行くには、是非とも燕尾服が必要だ。

然るゝ和製のハイカラー（怒つてはいけな、修行はその短氣が大の毒だから……）先生は、何かといふとフロックコートを着込むで、その外は背廣服が一着あればよいやうに心得て居るが、なか／＼以つて、左様なケチな了見では、ウカと人道は歩かれ申さぬ。

それから、御注意申すが、襟飾などもフロック、コートを着たからとて無闇に白を用ゆるのは、チト滑稽だ。

又た赤いものは、派手なものゝやうに思つて日本では、馬鹿と思ひで居るが、外國では決して左様で無い。五十六十の老人でもこれを附ける人が間々あるから、ハイカラーにならうよは、これ位なものは辭退せぬ覺悟が肝腎だ。

次ぎは食事だが、これは日本一流のお茶づけサラ／＼は甚だよく無い。決していやしいなど、思はず、何んでも食事は一日の娛樂の一つに數へて置いて、その間は最も愉快に過さねばならぬ。

それで又た、如何なる場合でも、食事の時分など、人を訪問してはならず、止むを得ざる場合には、その人が食事する間、他の室でそれを待つて居るやうにして、みだりに招かれぬに、その響應を受けてはよく無い。

それと反對に、人が自分を訪問して來ても、時になつゝからとて、「何も御坐いませんが」と、飯を出す必要も無し、自分が食事中であつたら遠慮なくその人を待たせて置いて關はぬ。斯かる場合、何ぞ必らずしも、

吐哺の煩を敢えてせんやだ。

併し、その親友知己を招ひた時は、身相應には馳走をして、充分楽しんで、充分懇ろに饗はなければならぬ。

而して憊んな時には、二天作の胸算用は大の禁物で、主人たるもの宜しくニコノ然たらずんばある可らずだ。

又た住居は、手廣く無くとも、奥の知れ無いやうにして、漫りに人を應接室以外に入れてはならぬ。

そして其室には自分の理想して居る人の額を掲げ、來客を待たして置く間だの讀み物を、然るべく飾つて置く。

但し中の半分は背皮金文字入り洋書でその全部は讀ま無くも、人と話

しの出来る位にはして置かねばならぬ。それには字書と首つ引ても讀める人は結構だが、然らずんば、内證で誰の議める人に見て貰ひ、その請買りでも差支へ無い。あなかしこ、憊んなこと迄傳授しては、そんなよ某所等の大先生にね目玉頂戴は定の事だ。

そこで、應接室の外に、今一つ飾附けを注意しなければならぬ處がある。それは取りも直さず書齋で、これは親友だの懇意のものだのを通した時、そのアラを見られ無い爲め、應接室同様、充分の裝飾を要する。

まづ第一に某々の肖像画、それから大理石の半身像、無論書架は、金文字入りの洋書、但しその中にはカーチヤの「富の福音」なども無ければなるまい。

それから紫檀の机に、何々といふやうな舊式のごとは一切を廢し、  
 て、何でもテーブルに椅子好み、その椅子も安樂椅子だの動搖椅子だの  
 で、ならば家も西洋館といき度い。が、それ迄は無くも、絨氈位は敷き  
 つめて、疊を見せぬ用意は是非とも爲すばなるまい。

### 第二態度

これも絶對的にハイカラーの資格とされて居るもので、最も多くの修  
 行を積まねばならぬものだ。

まづ道を歩く時は、少しく首を延して遠くを見る形ちをとり、充分  
 胸を張つて音羽屋式にソリを打ち、いつでも人に逢つたら眼下に瞰下

すやうにして、如何なる場合にも冷然と構へ込み、大山が崩れて來ても  
 動かぬといつた見柄をなし、其實常に人の顔色を讀じて、内心でその針  
 路を誤まらぬやう注意を怠たらず、人が何ごとかを話かけたら、

「ア、成る程……」とその言の終らぬ中に首肯いて見せ、よしんば其  
 ことは自分に知らぬまでも、巧みに對手の話に口を合せ、假令可笑く無  
 いことよでも盛に作笑ひをして見たり、また急にすまし切つて見たりし  
 なければならぬ。

併し、ゆめく女にこの態度をとつてはいかぬ。  
 概して女には執拗い程優しく持ちかけ、公衆の前でも寧ろ自慢して、  
 或る場合には靴位穿かして遣るやうにせねばならない。而して芝居の好

ききな女には芝居、音楽の好きな女には音楽と、何でも角でも對手次第でこの話に水を向け、恚る間に先方の嗜好魚負を知つて、それに合槌を打ち、主義もへちまもいらぬといふ風で、方圓の器に随ふ的の水心最も必要である

且つ如何なる場合にも微笑を以て人に答へ、決つして漫に言葉を出だしてはならぬ。これは古人の所謂、

口わけば腸見ゆる田螺かな

を學ぶもので、多辨を弄する内には、つひその奥底を見すかされて仕舞ふ恐れがあるものだ。

處で、繰返へして言つて置くが、必らずとも、女よ對しては、先の

冷然主義をとつてはならぬ、なせなれば、女といふものは、最も心の動き易いもので、これに對する男が、より多く熱誠で無いと、決して近づくことは出来ぬ場合がある。いひかへれば、斯る時の男は、或る方面から見れば鼻下長である位がよいので、この辛抱のハイカラーとなるよりは、嫌でも應てとせねばならぬ。

### 第三 嗜好

好嫌にかゝはらず、これ丈のことは是非とも必要であるといふものがある。

夫は生花よりも、茶の湯よりも、第一番に音楽で、深いことはいらぬ



から、廣くわり度い。

即ちオーガン、ピアノは元よりの事、ヴァイオリン、ユルチットから、バンデリン其他ども、一通は音色だけでも知つて居なければいかぬ。

そして音楽會の度には出席して、それを聞きもし、又た新聞雑誌の批評を見て一知半解でもよい、その請賣りをするのが肝腎。

その次ぎには繪画だ。

これは狩野派光琳派の日本流より、水彩画油絵の洋風を見て置く方がよい。最もこれは紫を多く用ゆる新派が一番評判のよいので、模様繪では佛蘭西のブールムーボー（新式繪模様）。古畫ではニラン、ミレー、コロウ等。

さて又た文學も多少の嗜好が無ければならぬ。

即ち詩でハイチ、ロゼツチ兄弟、ゲーテ。小説では佛のツラ、露のゴーリキ。劇曲ではイヴセン、マアテルリンク。猶外に北米ではオマーカーヤムなども一時流行したが、今は下火で、勿論日本に迄は及ばない。

併し世の中は重寶なもの、英語にのみ熟達して居あいても、右に掲げた作家等の手になつたものを窺はうとなら、随分簡單なもので無いことは無い。

まづハイチのものは新聲社から出た「ハイチの詩」近く金港堂から生れた「詩人ハイチ」などを見れば一ト通りは知ることが出来るし、ロゼツ

チのものは「帝國文學」、「萬年草」などに散見して居るから就いて見たらよい。ゲーテのものも「ファウスト」の初めなど譯されたものはあるが、これ以つて完全のものでないから、前記の雑誌を漁るに若くは無い。ツラの小説も單行本には無いが「文藝俱樂部」新小説「文藝界」に掲げられてゐる。ゴリキも同断。イヴセンは早稻田文學叢書の中から「社會劇」が譯されて居、マアテルリングは矢張「萬年草」に見えた。其他ハ事宜によつて編者が内々御傳授してもよい。

イヤ、頭痛のする修行はこれ位にして置いて、又候形式の修行にかへらう。

#### 第四 帽子

旅行中の涼車のなか、散歩などには鳥打帽で、これはバツとした、縞物か、然からずんば、白の革物。勿論訪問や用あつての外出には、黒の中ヤマは先づ動かぬ處で、夏も、彼の獨逸皇帝が用られなんだ前は、誰もバナマなどは病人か老人の被るものとして手にだも觸れなんだ。併し麥稈帽は英國流ではあるが、今以て捨たらぬ。

其他は服によつて、たとへば燕尾服なら絹帽だとか、モーニング、ディンナー、イヴニング、又ははフロックなら中ヤマ、背廣服なら中折帽といふやうで、これ等は、自づと相場が極まつて居るのだ。

### 第五 杖 笻

所謂 スタッフなるもの、これもハイカラーの腰巾着だ。

好みは山椒のゴツ／＼したものでは無く、華奢な、細つとりとした、首に犬、象、獅子などの彫刻物ある、粹仕立て、大低は右の小脇へ抱へるか、左の腕へチヨイと引っかけ下げて置く。が、近時獨逸あたりでは、冬の極寒に入ると、道をゆく時、勢ひ両手をポケットへ入れなければならぬ處から、外套の前釦の、上から二つ目へ引っかけ風が流行る。これは一寸粹な仕草だが、如何にもステッキングを伊達に持ちますといはねばかりだから、餘り感心はせぬ、どつちかと言へば先づキザ掛つた方だ。

### 第六 眼 鏡

近視眼の人は勿論、伊達にかける人でも、通例は金の平打物で、間々縁無しを好むものもある。

處が和製のハイカラー先生は、時に誤解して、所謂鼻眼鏡を用ゆるものがある。が、これは元獨逸の大學生が用ゐたもので、決してハイカラー紳士のすべきものではないのだ。

又た片眼鏡は、彼のチャンバン氏も常用して居たものだから、用得るなら、結構この上無したが、お合悪様！日本人の眼窩は、歐羅巴人のやうに廣く無いから、この野心は断念しなければならぬ。故に強てその

上をどなら、寧ろ思ひ切つて白金製の線を附けるよ若くは無からう。

### 第七 時計

普通の金時計は野暮の骨頂である、これは断じて持つてはいかぬ。といつて、金着の所謂天麩羅を持たうなど、いふ量見方では、勿論ハイカラーになる要は無。

然らば何様なものを持つたがよいのか。まづ十七八形の銀側薄手、猶濫く出れば白金側が上乘の品であらう。

さて鎖はこれも金は下品、銀も好ましく無いから、矢張プラチナか赤銅。が、メット粹を利かせば、そんな事々しいものは一切抜にして、絹も

の、リボンか何ぞか妙、其餘は意を用過ぎると、凝て思案に能はぬものとなつて仕舞ふ。

### 第八 靴

兩三年前迄は、亞米利加好の頭細が流行たが、今日では英國風の昔にかへつて、頭は切つて取つたやうな平形が多い。

それで、深ゴムは極の野暮で、まづハイカラーともいはるゝ人が足にしやうといふには、短いのか、編上を中途まで組むで結び切りよしたものの。近頃は専らこれが多いやうだ。

色は、黒が反つて濫く、茶も、普通のはからもう面白くない、からし

て、強<sup>し</sup>めて色<sup>いろ</sup>變<sup>か</sup>り<sup>が</sup>を<sup>を</sup>と望<sup>のぞ</sup>むなら、鱗<sup>うろこ</sup>皮<sup>かわ</sup>か何<sup>なん</sup>ぞで無<sup>な</sup>ければ、到底<sup>とて</sup>も醜<sup>みに</sup>かしくて穿<sup>は</sup>けるものぢや無<sup>な</sup>い。  
 みがきは日<sup>ひ</sup>よ二<sup>に</sup>三<sup>さん</sup>度<sup>ど</sup>づゝかけさして、いつも鏡<sup>かがみ</sup>のやうで無<sup>な</sup>ければなら  
 ない。

第九 其他の携帶品

すべて華奢<sup>わしゃ</sup>物<sup>もの</sup>に限<sup>かぎ</sup>る、として何<sup>ど</sup>ちらからといへば、滋味<sup>しよみ</sup>の勝<sup>か</sup>つたもの  
 だ。

指環<sup>ゆびわ</sup>は女持<sup>おんなも</sup>ちと違<sup>ちが</sup>つて、寶石<sup>ほうし</sup>入りならば、ほんの一つか二つ這入<sup>はい</sup>つた  
 もので、左<sup>ひだり</sup>の第三<sup>さんしゆ</sup>指<sup>ゆび</sup>に箝<sup>は</sup>めるのがよい。

ハンカチーフは夏<sup>なつ</sup>は麻<sup>あ</sup>布<sup>ふ</sup>、冬<sup>ふゆ</sup>は絹<sup>きぬ</sup>の無<sup>む</sup>地<sup>ぢ</sup>物<sup>もの</sup>で、綾織<sup>あやおり</sup>などは、甚<sup>はな</sup>はだ嬌<sup>うれ</sup>  
 しく無<sup>な</sup>い。

手袋<sup>てぶくろ</sup>は夏<sup>なつ</sup>冬<sup>ふゆ</sup>ともに革<sup>かわ</sup>製<sup>せい</sup>が一番<sup>いちばん</sup>で、毛糸<sup>けいさい</sup>製<sup>せい</sup>が最<sup>さい</sup>下<sup>か</sup>等<sup>とう</sup>だ。

襟飾<sup>えりかざり</sup>は白<sup>しろ</sup>に赤<sup>あか</sup>、桃<sup>もも</sup>色<sup>いろ</sup>、緑<sup>きぬ</sup>の入<sup>い</sup>つた、細手<sup>ほそて</sup>のもので、ダビーが目下<sup>もくか</sup>の流<sup>りゅう</sup>  
 行<sup>こう</sup>である。

述<sup>の</sup>べて爰<sup>こゝ</sup>に來<sup>く</sup>ると、ハイカラーが交際<sup>こうさい</sup>上<sup>じやう</sup>の、最<sup>さい</sup>必要<sup>ひつやう</sup>品<sup>ひん</sup>なる名刺<sup>めいし</sup>に就<sup>じゆん</sup>  
 て一言<sup>いごん</sup>せねばあらずなつて來<sup>き</sup>た。

處<sup>ところ</sup>か、この名刺<sup>めいし</sup>には別<sup>べつ</sup>に流<sup>りゅう</sup>行<sup>こう</sup>、捨<sup>す</sup>たりが無<sup>な</sup>いから、人様<sup>ひとさま</sup>々に思<sup>おも</sup>ひく  
 の物<sup>もの</sup>を拵<sup>そろ</sup>えて居<sup>ゐ</sup>たが、これまでの如<sup>ごと</sup>く、金縁<sup>きんぶち</sup>臺<sup>たい</sup>紙<sup>し</sup>へ、ユテ／＼と肩書<sup>かたがき</sup>を  
 つけるのは面白<sup>おもしろ</sup>く無<sup>な</sup>い。これは寧<sup>むづ</sup>ろすまじ迄<sup>こ</sup>ちで、小形<sup>こがた</sup>の無<sup>む</sup>地<sup>ぢ</sup>紙<sup>がみ</sup>へ、六

號の明朝か何かで名前だけを刷らせ、其他ことくしい肩書は、先刻御承知の筈だがと、知らを切る方妙策である。

そして羅馬字のもの、別に製し置いて、日本字のものと、一葉で二様に使はうなどの了見は、ゆめく起す可らざるものだ。

### 第十 髪

さて、いよく髪好みを言はう。

當時の最流行は、髪を短く剃り上げ、襟脚を圓目につけた、乃ちラウンドが第一で、たゞ單に髪だけを短くしたのもある。

別けたは大方左よりの髪頭から、右へなで、チョイと右手の前の方

を子ジたのが若手の人に呼びものとなつて居、稍年上の者では、亞米利加式ではあるが、中央から別けて居る。

が、いづれも、ニスメティックなどの舊式的脂物は全廢として、目下バンドリンが最良の呼物、又たこれよ越すもの、他に餘り無いやうに思はる。

### 第十一 鬚

鬚髯、無意味にたゞ鬚髯といつて退ければ何でも無いやうなもの、外國ではこのヒゲを以つて、大に人格を判断する風習があるから、注意せらねばならぬ。

まづ上は八字をピンと跳さして、所謂ウキルヘルム式にし、下はチヨイと顎の處だけへハート形の格好よさを残して他は剃り落したものと無事で、然らずんば単に上だけを生やすのだ。

併し、いづれにしても、ウキルヘルム式が獨逸ばかりでは無い、一般の流行で、彼の角髭は卑下されて居るのみならず、外國には或る思はずしき但勝さへあるのだから、忘れても生やしてはならない。

さて形の作りやうは、まづアルコールランプに熱しおしたコテを以て、然るべく髭の端を捲き、猶その無態な處をバンドリンをつけて直せば、最初の二三日は不如意のことはあつても、それからは思ふがまゝに形がとれてゆく。

又た、なかには顎髭を全軀に生やして居る人があるが、これは甚だ爺むさく、所謂ハイカラーへの相應しからぬものであるのだから、随分共に却けなければならぬ。

要するに、いづれの場合を問はず、「華情」といふことを忘れなしたら、自らハイカラーの態容を得ることが出来やう！

第十二 言語

眞のハイカラーには又たその言語の使ひわけが甚だむづかしい。讀者諸君！諸君は單に英語を知つてさへ居れば、ハイカラーとなることを得るものとして居らるゝかも知れないが、眞のハイカラーとなるに

は、下に述べる所の言語を學ぶことが、その最大修行である。一般の世間がいふ如く、元來英語なるものは、商業國の言葉として、たゞ貿易市場にのみ用ゆるものとされ、獨逸語また、學問語として斯道のみ重寶がられる。

されば佛蘭西語に至りて、初めて世界の交際場裡にこれを用ゆるを得以て世界のゼンツルメン及びレナイと相語るべく、以つて眞のハイカラ一なる資格を得るに至るのだ。

然らば眞のハイカチ一なるには、この佛蘭西語ばかりでよいか、決して左様なたやすいことではゆかね。こればかりは翻譯物で誤魔かすわけにもゆかねば、英語獨案内では、猶更ら以て役に立たぬ。

で、勢ひ師に就いて學ぶのであるが、その師も、佛蘭西語ばかりならまだ小見易いのだが、こゝに一大困難といふのは以太利語だ。

こればかりは一寸さがしたからとて、めつたに教師が無し、よしあつたからとて、容易に學べるものでも無し。

幸ひにオットー氏の會話文典があるから、英語に熟達の上は、曲なりにても、獨學が出来やうかなれど、その然らざるものは、困難も亦た一層だ。

それなら、何も以太利で無ければならんといふわけもあるまいから、獨逸でも遣つたらといふ人も御坐らうが、それがその大いにとうで無いのだ。



といふものは他に理由のあつて存するところで、その理由といふのは外でも無い、憊うだ。

元來この以太利語は、世界の交際場裡で、その情人と語る言葉としてあるので、これを知らぬものと、未だ以て共に戀を語るべからずとし、戀を語る可からざるものは、呼ばで眞のハイカラーすることは出来無いとしてあるからだ。

とは言へ、御安心あれ！これは外國での話で、未だ、今日の日本は、それ程迄に込み入つ修行はせずとも、ハイカラーにはなれるのだ。が、併しながら、修行は何所までも修行、知つて居るのは、言はずとも、知つて居ないのに勝つて居るのだから、何所へ出ても恥からぬハ

イカラーになるには、是非とも御研究あれ、學校通ひが辛抱出来るなら神田一橋の東京外國語學校で教えて呉れるから。

### 第十三 自轉車

誤解する勿れ！自轉車はハイカラーの是非に持たねばならぬものではないのだ。

外國ではこれを實用にするのは郵便の配達夫か通信社の傳信夫で、紳士、淑女は決してこれを實用に供しはせぬ。

けれども絶対に用ぬといふのではない。その是を用ゆるのは、郊外散策の場合で。これは馬も同じことだ。

故一自轉車が無いからと言って、ハイカラーの資格が欠けるといふのは無く、また郊外散策に是非必要だといふことも無い、これは騎馬の方が、どちらかといへば寧ろハイカラーのハイカラーであるのだもの。

されば一通りの稽古だけはして置くがよからう。  
處で一言して置く、サイクリストとハイカラーとは全然別種別様のもので、サイクリストはサイクリスト、ハイカラーはハイカラーであるのだ、追手ながら一言御注意！

### 第十四 寫真器と繪の具

これは是非一修行して置かねばなるまい。なせなれば、郊外散策、

夏季の旅行などの記念として、その踏んだ場所、往つた處の一部若しくは全部を寫して、これを話の種にすることが、ハイカラーたるある一部の資格となつて居るのであるもの。

併し寫真機は、コダックで修行し、繪の方は最初木炭画から入つて、水彩画が少しいければそれでよい。

勿論油繪まで漕ぎつけば、これに越したことは無いのであるが、是非そこまでゆけばはお勧め申さぬ。

何故なれば油繪となると、徒らに大仕掛になつて、兎角ことをつくうになり易いから、好どなりゆきでなら、それの御隨意であるが、いはゞそれ程で無くてもよろしからうと申すのだ。

が、必ず手札形の寫眞と、スケッチの寫生はハイカラーの持たねばならぬものと心得て居つて欲しいのだ。

### 第十五 銃 獵

郊外散策のことが出たから、追手ながらに一言して置くが、これも自轉車同様、敢えてハイカラーの資格に關係するといふ程のものでは無し。

遊獵といふ嗜好は、ある特種の人に限られたもので、ハイカラーとは別に趣をなして居るのであるから、好きとあれば其邊、是非にはお勧め申さぬ。

併し、やつて見やうとなれば、これも交際の一機關となるのだから、決つてするなどでは無い。

が、まづ、それにしても小鳥狩位の處にして置いて、例の如く、無益の殺生は爲ぬものと、すまじ切つて居るがよからう。

オット、いふのを忘れて居たが、無益の殺生といふは、小鳥よりも、そんじよそこの物言ふ鳥を狩たて、歩くこと、これもハイカラーの資格のやうに誤解されて居るが、これとても右同類といはねばなるまい。

お氣よさむつたれば失禮！併し忠言耳にさからうのたどへもあるから前に申ました通り、喜怒哀樂を色に出すやうでは、ハイカラーのハイカラーとは言はれぬのであるから、そこはサッとこらへて、下腹へ力を入れ

臍の邊をウムとさばつて（但し放屁一番他を驚かすなども器量でないから）内際で腹をさすつて居ること、また肝腎がなめの修行である。斯くいひ立てると、氣の短かい諸君は、ア、恚なに面倒なものなら、ハイカラーはお止めだ！とつぶやかるゝかも知れぬが、決してそんなものではない。

岡見八目、外から眺めて居れば、どうとでも見やう聞きやうで、むづかしくも、やさしくもなるのだから、苦しいなんぞといふことは、てんから考へず、向ふを通るハイカラー先生を眺めて、畜生！今に先越してやるアツ……と、一番力むで見玉へ。悪いことは申さぬ。精神一到何事か就らざらんやだ、陽氣の向ふ處金錢も亦投ずだ、江戸子のチャキ

くで、又た巴里子のチャキくたる、豈快いならずやでは無いか。とはいふものゝ、編者は灰殻、餘り氣焔を吐き立て、は、自らの氣焔で自らが飛んでしまふも定であるから、釋迦への説法は是れで止めとして、以下は諸君の獨修にまかせよう！

録附  
當世ハイカラ修行 終

76/3/30

97  
93

不許復製

明治三十六年九月廿七日印刷  
明治三十六年十月一日發行

定價金貳拾五錢

發行者兼

文昌堂書店

東京市麹町區四丁目十三番地

代表者

磯部龜吉

東京市麹町區四丁目十三番地

發行所

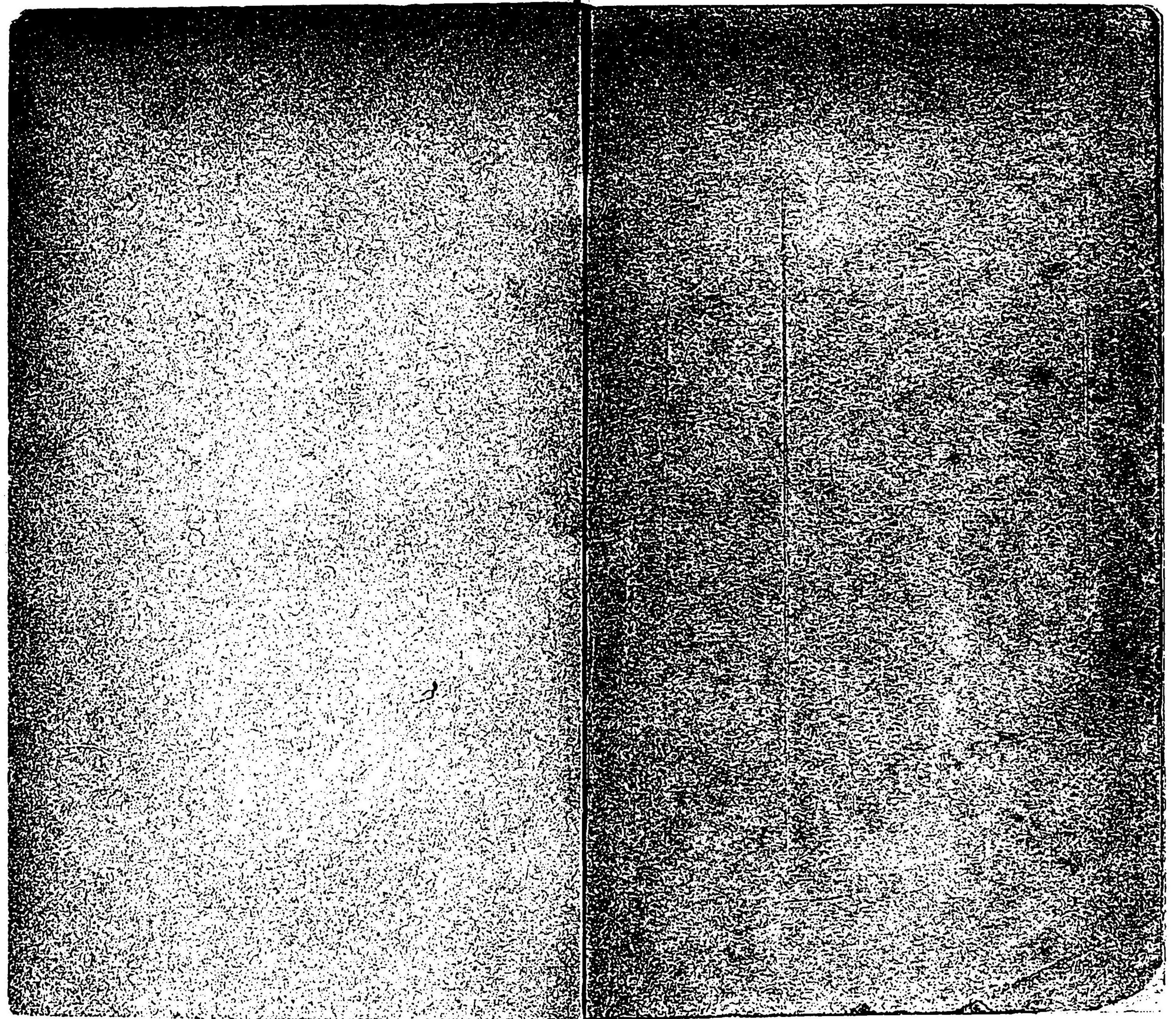
文昌堂

東京市麹町區四丁目十三番地

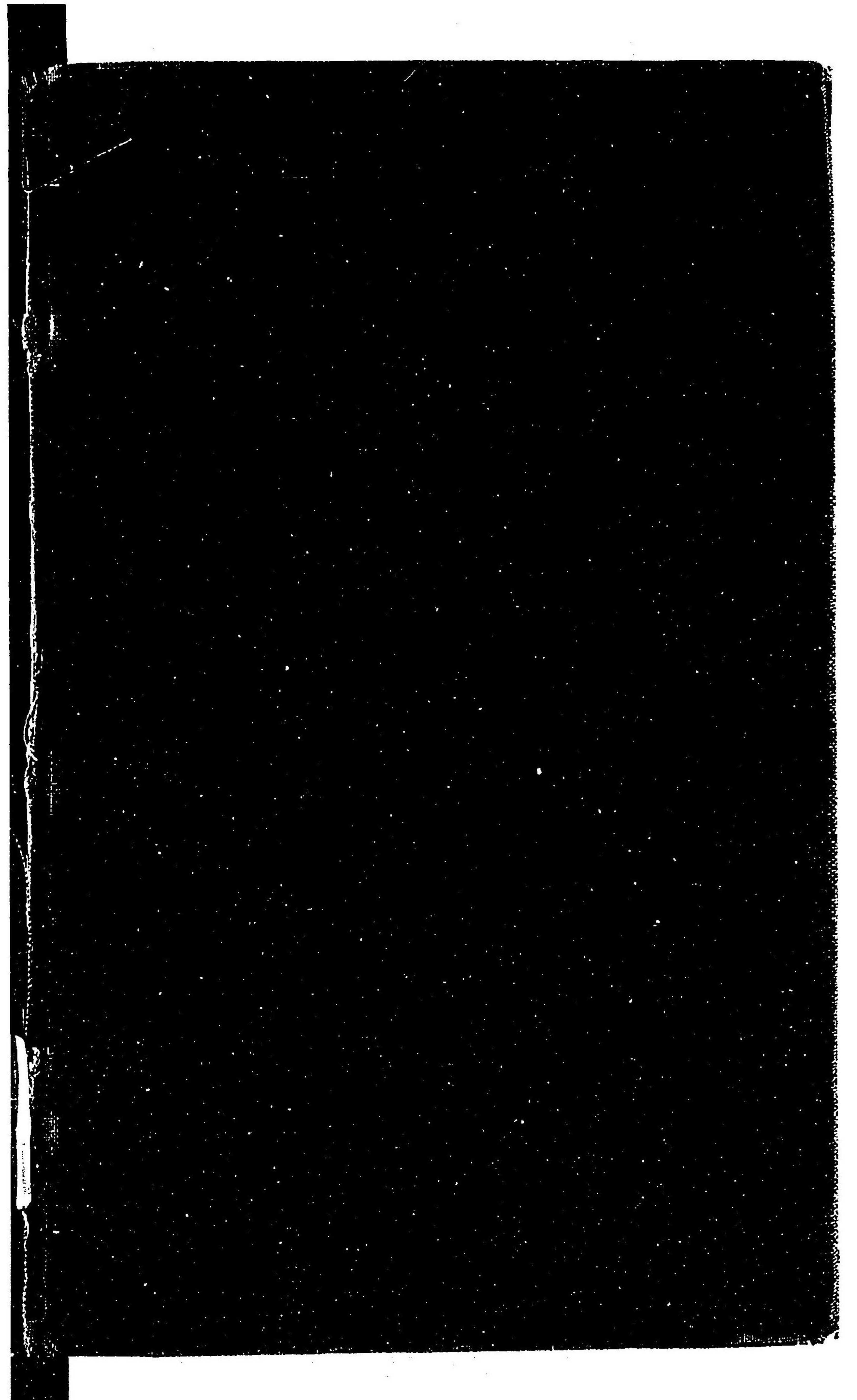
印刷所

麴町活版所

東京市麴町山元町三丁目一番地



99
.
93







022203-000-9

97-93

ハイカラー珍談(西洋土産)

大和 灰殻/編

M36

ADA-0639



